

<オリエンテーション>

A. テーマ：宗教と科学の関係論構築に向けて モルトマン(1)

B. 演習の目的

「宗教と科学」の関係を現代世界の新しい問題連関において解明することは、現代キリスト教思想研究の中心的テーマの一つに他ならない。本年度は、こうしたキリスト教思想研究の動向について、現代ドイツを代表する神学者モルトマンのテキストによって、考察を深めてみたい。

モルトマンは、『希望の神学』によって紹介されて以来、日本においてももっともよく知られた神学者の一人であり、彼の主要な著作は翻訳で読むことができる。前期のモルトマン神学については、フランクフルト学派との交流などに基づく社会変革に関わる実践的な視野を有する神学によって、また後期のモルトマンについては、エコロジーやフェミニズムなどの現代思想との交渉をも視野に入れた神学体系構想によって、高に評価を受けてきた。こうした神学思想のキーワードとして、「歴史」「終末論」を挙げることができるが、最近公刊され本年度取り上げられる論文集『科学と知恵』では、これまで十分に知られてこなかったモルトマンの諸論考が収録されることによって、新しいモルトマン解釈の可能性を示している。しかし、『科学と知恵』で扱われる「自然科学と神学との対話」という問題は、単にモルトマン解釈にとどまらず、この演習でこれまで試みられてきた「宗教と科学」の関係論構築にとっても重要な意味を持っている。

本年度の演習では、この論文集に所収の論文を順番に読み進めてゆく予定であるが、モルトマン神学、あるいは現代キリスト教思想全般を理解するに必要となる関連事項について、随時説明を補足する予定である。また、参加メンバー自身の問題意識に基づく研究発表の機会も設けたい。

C. テキストについて

Jurgen Moltmann, *Wissenschaft und Weisheit. Zum Gespräch zwischen Naturwissenschaft und Theologie*, Chr.Kaiser 2002.

D. モルトマン(Jurgen Moltmann 1926.4.8 - , ハンブルク生まれ)について

ドイツの神学者、組織神学および社会倫理学

著作

Prädestination und Perseveranz. Geschichte und Bedeutung der reformierten Lehre "de perseverantia sanctorum", Neukirchener Verlag 1961

Theologie der Hoffnung, Chr. Kaiser 1964

Der gekreuzigte Gott, 1972

Kirche in der Kraft des Geistes. Ein Beitrag zur messianischen Ekklesiologie, 1975

Perspektiven der Theologie. Gesammelte Aufsätze, 1968
Was ist heute Theologie? Zwei Beiträge zu ihrer Vergegenwärtigung, Herder 1988
『二十世紀神学の展望』(渡部満訳)新教出版社 1989年

Trinitat und Reich Gottes. Zur Gotteslehre, 1980
Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre, 1985
Der Weg Jesu Christi. Christologie in messianischen Dimensionen, 1989
Der Geist des Lebens. Eine ganzheitliche Pneumatologie, 1991
Das Kommen Gottes. Christliche Eschatologie, 1995
Erfahrungen theologischen Denkens. Wege und Formen christlicher Theologie, 1999

研究文献(日本語)

組織神学研究会編『ユルゲン・モルトマン研究 組織神学研究第1号』
聖学院大学出版会 1998年
沖野政弘『現代神学の動向 後期ハイデッガーからモルトマンへ』創文社
1999年
森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館 2005年

E. 授業(予習+出席・発表+復習)の進め方

1. テキストの扱い方

- ・モルトマンのテキストは、最初の章から順番に読んでゆく。一回に扱うテキストは一節程度(以上)として、段落単位の内容把握を求める。
- ・数年かけて全体を扱う。

2. 演習参加者の役割

担当者： (1)授業前：読み・訳す・分析する レジюме作成
要旨・問題点・補足事項
(2)授業での発表：内容の説明と議論すべき問題の提供
(3)授業後：まとめ プロトコール(前回の確認と補足)

担当者以外： テキストの分析
議論への参加

3. 次回以降：前期 4/13, 20, 27, 5/11, 18, 25, 6/1, 8, 15, 22, 29, 7/6, 13

次回は、芦名が「宗教と科学」関係論について、説明を行い。担当の順番を確定する。

4. 関連研究会・演習に関して

(1) 演習・研究会「キリスト教思想研究の現在」(月3)

このモルトマン演習の関連で、研究発表したい人は、こちらの演習・研究会で発表が可能

(2) 研究会「近代/ポスト近代のキリスト教」(火5 予定)

モルトマン、「宗教と科学」関係論を含めた、近現代のキリスト教思想についての共同研究。共通テキストの輪読と個人研究発表。研究成果の刊行。

F．成績について

演習担当 平常点
レポート(夏期)

G．モルトマンの思想内容について

1．森田雄三郎 『現代神学はどこへ行くか』教文館 2005年

目次

第一部 現代神学の概観と位置づけ

日本の神学はどこへ行く?(1980)、現代神学の動向(1987)

第二部 神学基礎論とその展開

A 神学基礎論

キリスト論の視点(1978)、「史的」とは? - キリスト論の前提 - (1979)

ハンス・キョルクの『教会論』の論理(1977)、論理実証主義への神学的展望(1968)

「客観的な意味理解」は可能か(1979)、解釈学的教義学の構成について - エーベリンクモデル - (1982)、神学的構造主義の問題(1983)

B 展開

システム社会・宗教・実践(1984)、創造と進化 - 創造における無 - (1990)

神の愚かさと人間の賢さ(1996)

第三部 ユダヤ教への視点

『ゾーハル』序説(1989)、罪をおかすことによって罪から救済できる? - ユダヤ神秘主義の失敗からの警告 - (1996)

第四部 解題・書評

解題 有賀鐵太郎 『キリスト教思想における存在論の問題』(1981)

書評 松村克己 『根源的論理の探究』(1976)

書評 武藤一雄 『神学的・宗教哲学的論集』(1994)

「現代神学の動向」(1987)

「現代」「バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感」、「このような動向が表面化しはじめたのは六〇年代半ばであった」、「一九六五年から今日まで既に二二年が経過」、「新しい動向を漸く全体として総覧できる時期が来たと言えよう」(32)

「この二〇年間に神学が集中した関心事は二つの問題、すなわち、神理解の問題と、教会の社会的な意味連関(Relevanz)にあった」(33)、「ある意味では、現代になってはじめて本格的な文字通りの世界史は始まったとも言えよう」、「宗教サミット」(33)

現代風に言えば、グローバル化した世界における神学

「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界的変化に対応しようとする哲学運動に関連している」(33)

実証主義に根を持つアングロサクソン系の分析哲学、ドイツ系の実存思想に典

型的に代表される解釈学、ソビエトの正統派マルクス主義の弁証法

「一九六〇年代前後になると、この三者のそれぞれが拡大・内部分極するとともに、相互に接近して、類似性を示す現象が表面化してくる」(34)

「政治・経済・社会の新しい動向は、科学・技術と思想動向とも深く関連しつつ現われてきたのである。技術社会の出現とともに変化しつつある人類の世界史的全局面に共通の媒介として言語がいっそう深い意味を持ってくる」、「人間生活の歪みもまた、各面に現われてくる。核兵器の傘の問題から、経済システムの覇権争いと搾取、食糧不足、資源の枯渇、環境汚染の問題に至るまで、一挙に噴き出してきた諸問題」(35)

「六〇年代以後に現われた新しい神学的動向のうち有意義と思われるものだけを挙げるならば、次の四つの流れに大別されるであろう」(35)

「解釈学としての神学」「歴史の神学(宗教学・宗教史の神学、科学論の神学)」「希望の神学・革新の神学(解放の神学)」「プロセス神学」

「一 解釈学としての神学」

「二 歴史の神学(宗教学・宗教史の神学、科学論の神学)」

「四 プロセス神学」

「三 希望の神学・革新の神学(解放の神学)」

「モルトマン」「その後のWCCの神学的基本線を提供する」「モルトマンに刺激されて、もっとラディカルなさまざまな解放の神学が発生した」「ネオ・マルクス主義のユダヤ人哲学者E・プロッホと深い関係を持つ」、最初の三部作は「なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまること」(41)、「エコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している」、「ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上の一つの重要な焦点をなす」(42)

「彼の魅力は、十字架につけられて復活したキリストへの信仰の敬虔と、社会的正義の実現を旨とする聖霊論的社会行動論とが、統合されているところにある」(42)、「理論と実践」の面では、理想を追求する情熱に燃える青年層には、モルトマンの弁証法は魅力的であろう、「同時にまた、そこに彼の不十分さも見られる」、「三一神のペルソナの中では父論が弱く」「創造論とエコロジーの神学をも展開する方向を示しているが、はたしてそれがユートピアを目指す社会行動理論にうまく接合できるかどうかは、なお疑問である」、「弱さ」「ユートピア論は現代の神話であり、熱しやすく冷めやすい」(43)

「現代は無味乾燥な不毛の神学時代と呼べよう。またその意味では、希望の神学の流れのみが理想主義的であるのに対して、他の流れはきわめてリアリズム的であるという対照が、目をひく」、「リアリズムの傾向の強い神学状況の中で、われわれは、常に一つの点を念頭を中心に留めねばならない。それは、神学とは何を目的にしているのか、という自覚の問題である」(47)、「神学は、神のゆえ、信仰のゆえの科学であるとの自覚は、神学

する者の基本条件である。というのは、進歩的な神学者たちが福音と現代社会との意味連関を追求している反面、多くのキリスト教徒たちはかえっていっそう保守的な教派へと走りつつあるというキリスト教界の現状は何を意味するのであろうか。」

「技術社会の歪み」「決してこれを回避・逃避してはならぬであろう」、「長い目で見れば、聖書に基づいて、精神の内面性の深みをいっそう探ること、技術社会における人間の生存の問題に正面から応えること、聖書的個人道徳のみならず非神話化された歴史の目標と社会倫理をこれと媒介させて世界平和の確立に貢献すること、これらの三点を満足させる神学、「技術社会の主イエス・キリスト」を思索し抜くことのできる神学のみが、現代に生き残ることができるであろう」(48)

ネオ・マルクス主義、エコフェミニズム、モルトマン

「創造と進化 - 創造における無 - 」(1990)

「『とぼしい時代の神学』」「この一〇年間、ドイツのプロテスタントの組織神学の分野で刊行された書物のうち、宗教的経験の根幹問題と真正面から取り組んだ注目すべき大著としてあげられるものは、ほんの僅かである」「G・エーベリンクの『基督教的信仰の教義学』三巻(一九七九年)」「方法論的にも、ハイデッガーのいわゆる「転向」も問題を神学的に十分消化しきれないままの状態を示している」、「W・パンネンベルクの『組織神学』第一巻(一九八八年)は、彼の体系的著述の第一巻である。基本的にはやはりユダヤ教 - キリスト教的伝統に根ざす神論の展開であり、彼の標榜する「歴史の神学」、「普遍史の神学」、「宗教の神学」あるいは「宗教史の神学」の具体的内容は、なお将来の著作に委ねられ、現状ではほんの一端をうかがい知られる程度である。とりわけ、近代科学の思惟と世界の諸宗教の諸経験との触れ合いをも含む将来の「総体」の「予測」の展開は、その早くからの予告にもかかわらず、現在ではまだ期待できそうにもない」(216-217)

「最近のモルトマンの著作」「『三一神と神の国』は、その内容から言えば、モルトマンの体系的著作の第一巻である」、「その後、一九八九年に出版された『創造における神 - エコロジー的創造論』」は、モルトマンの創造論を提示するものであり、彼の教義学第二巻にあたる、「メシアニズムの性格の強いモルトマンの書物であるだけで、将来をみざす実践問題にむしろ主眼を置く彼の態度ゆえに、またエキュメニズム運動を通して現代の科学・技術時代の全地球的、人類的危機に直接に取り組もうとするだけに、現在を超えて将来へとみざす彼の「エコロジーの神学」の議論には、確かに耳を傾けるに値する多くの洞察が含まれている」、「絶対主体としての神の主権的な人間支配、神の似像性と解釈された主体の人間による対象化された自然の一方的支配は、過去の神学的伝統の誤った聖書解釈に基づいている。このように古い聖書解釈を全面的に転換し、これを超えようと試みるのである。生ける神は愛の自己否定によって自然世界の創造をはじめ、これを保持する。また、自己否定的に歴史の中に自己表現の形姿を具現し、歴史の中で苦難を耐え忍びながら人間世界と和解し、翻って「新しい創造」を開始する」(218)、「創造において、いわば自然世界における神の自己表現、神の「鏡」、「神の似像性」として造られた本質的人間は、メシア・イエスの歴史的人格において「キリストのかたち」として具現され、

翻って、これによって新しい創造はメシア的将来の完成を旨してはたらしはじめる。このような運動を実現し完成しようとする神人関係の弁証法が、モルトマンのメシアニズム的弁証法の特徴である」(219)

「しかし、このように「一から多へ」(創造)と「多から一へ」(和解・救贖)とが、将来的かつ超歴史的な「栄光の御国」というメシアニズム的弁証法的統一によって成就される基礎構造を示すところでは、その最終的解決である弁証法的統一は、マルクス主義の主張と同様に、一種の循環を含んでいる。すなわち、そこでは常に「夢」(ユートピア)とその「先取り」との循環関係が、その基礎を形づくっている」(219)、「認識の秩序から言えば、メシア・イエスにはじまる「新しい創造」の中に、神の究極目標がすでにはたらし出していることを発見し、ここに発見された実在の光に照らされて創造を振りかえる時に、既に創造に初めから「栄光の御国」の光がまたたいていることを再発見するとも言えよう。しかし、そのモルトマン特有の論述は、はたしてどこまで説得力を持っているのであろうか」、「恩恵による和解をいわば跳躍点として、自然と恩恵の弁証法的統一が救贖の完成として語られる」、「創造から和解を経て救贖へと向かう将来的方向づけ」、「同時にまた他方では」、「救贖の完成は」、「永遠的であり、しかも歴史のどの時点にもつねに現臨する」、「多から一へ」の内在面と「一から多へ」と「多から一へ」とを統一する超越面との間に、揺れ動くことになる。そこにモルトマン特有のメシアニズム的統一なるものが見られる。そこでは、教会共同体の自覚としては内在面が強調され、神的実在性の自覚としては超越面が語られ、両者の論理的関連がなおも分明ではない」(220)

「このようなメシアニズムの旨すものは、神学的「創造」と科学文明的「進化」との媒介にある」(220)、「はたして満足のいくしかたで媒介されているかどうか」、「モルトマンの思想は、良い意味でも悪い意味でも「神学的」であって、宗教哲学的論理性に欠ける憾みがある、との私の印象」、「モルトマンを手掛かりにしつつも」、「モルトマンを超えた宗教哲学を旨すもの」(220)

「実存論神学の「自己」、「科学的進化論が出現した当時は、キリスト教会は大騒ぎを起こした」(220)、「創造神話はどのように理解されるべきであろうか」、「非神話化の提唱」、「ハイデッガーの「転向」に刺激されて、実存論自己理解の道の狭さを突破することを各様に試みてきた」、「ブルトマン派は、事実上、解体状態」、「神学的解釈学の弱点を露呈した」(222)、「神学的「自己」を見失い」、「彼らの師ブルトマンが訴えたような真理性の情熱にすら訴えるところが少ない」、「ブルトマンが最後まで執拗に自己理解を維持しようとしつづけてきた真理契機をも、忘れてしまったように思われる」、「信仰の根本構造そのものを見失いがちになる」、「自然と歴史の遊離を、ほとんどそのままに残している」(223)

「パンネンベルクの「自覚」。モルトマンの「自覚」とメシアニズム」、「両者はこの新しい観点を獲得するために、実存論的自己理解をすっかり放棄して、他に出発点を求めた」、「パンネンベルクは科学哲学的な知主義の方向を選び、モルトマンは社会哲学的な主意主義の方向を選んで、この忘却を遂行することになる」(224)、「パンネンベルクにとって「歴史」は」、「カール・ポPPERの『歴史主義の貧困』の批判を見つめつつ、構造主義を超え

た全体把握を目ざしている」「パンネンベルクの科学論的神学の立場では生きた人間の直観と情熱に訴える論理は、客観化されて、科学的認識と信仰の自覚が死んだ冷ややかな仮説になり」(224)

「モルトマンでは」「交わり」としての自己、「人間的自己は最初から「交わり」の中にある自己、あるいは「交わり」としての自己であって、教会共同体の「われわれ」としての自己である」「メシアニズム的人類的自己」「三一神的自己」「そしてこの「交わり」としての自己の立場から、モルトマンは現代のエコロジ的危機の問題に取り組むのである」「創造における神には「無」の「痛み」を含ませる」「科学的構想力のみならず詩的な生産的構想力をも通して得られる宇宙的将来の全体像を目ざしつつ、現在のニヒリズム的危機を克服しようとの自覚」(226)

「自然との共生を目ざす三一神論」「モルトマンはむしろ東方教会の三一神論的伝統から「ペリコレーシスの社会的三一神論」の立場をとる」(227)、「ペルソナの交わりそのものとしての一なる神を歴史の基底に見だし」「ユダヤ教のラビ的伝統の解釈を受け入れる」「自然と(歴史的)恩恵との弁証法的統一を目ざす」「御国」の終末完成の観点から、創造と恩恵を振りかえり。そこに既にはたらき出しているメシア的光を再発見する神学的循環を示す。歴史的現実の復活経験は、栄光の御国の認識根拠であるとともに、「栄光の御国」はキリストの「復活」の実根拠である」(228)、「万有在神論の粹組」「この神人関係の現状は、あえて西田哲学の言葉で表現すれば、「逆限定」「逆対応」というほかはない」「このことは、モルトマンではなおも「弁証法的統一」として語られているかぎりでは、まだ十分にその論理が解明しつくされているとは言えない」(229)

「創世記解釈。「無からの創造」」「宗教哲学の観点からの再解釈」「創造者と被造物との区別を生じさせる仕方での創造、神自身の中における「切断」を意味する創造」「無制約的「はじめ」の創造(すなわち、バーラー)」「一切の歴史的存在者を排除する意味の"ex"であり、「限界概念」」「モルトマンの説明は、あらゆる相対性を絶することと、それにもかかわらず現成するあるものを示そうとして、弁証法的に表現しようとするが、そのかぎりでは彼の論理はなお不十分である」(231)、「モルトマンにとっても「無」は宗教的象徴である」「象徴的「無」を存在論の次元へ引き下げるところに、無は近代の汎神論とニヒリズムの歪んだ結合として現われた」「他方では」「この「無」は、神自身の自己否定、自己制限、いわば神の自己「無化」を指し示す」(232)、「原創造における「無」」「神的な自己無化の作用」「自己自身を創造神へと限定する神の作用」「創造は神の無前提の愛の伝達」「神の絶対的愛」(233)、「絶対無」」「中世のカバーラー神秘主義の「シェキナー」論と「ツィムツーム」論を高く評価する」(234)

「神のシェキナー(現臨)とツィムツーム(収縮)」「神自身における切断」「神の内なる切断は神の外へと転換される」「創造はすでにそれ自体救済・救贖を目ざし、メシア主義的完成を目ざす神的神動的運動である」「神の内に生じた空虚・無であり、いわば無の「痛み」をみずからの内に含む絶対愛の自己表現」「場所的原理」(235)、「西田哲学」「絶対矛盾的自己同一としての自己はもはや自己ならざる自己であるとすれば、もはや自己と言うべきではないだろう。しかし、それゆえにまた歴史的人格の自己として存在するのであ

る。その意味では、キリスト教にせよ、ユダヤ教にせよ、絶対無はどこまでも絶対有であるとの主張は、その宗教的経験に基づく止むにやまれぬものである。またどこまでも宗教哲学にとどまろうとする西田哲学の本意でもあると解釈できよう」(237)

「無の創造」から「無からの創造」へ、「人間の創造における特徴」「似像性の創作は、神がそのわざの中にいわば自己の顔を映す鏡、自己に似た対応するものを見ざることを意味する。それは創造的人間に媒介される神の自己認識である」、「そこにおける関係性は絶対矛盾的自己同一である」「創造神の人間関係の底にペリコレーシス的社会的三一神論と呼ぶものをモルトマンは見、地上における神の似像たる人間の創造の中に、すでに比較を絶した神の卑賤化、引き下げ、自己制限を三一神論的に発見する」(238)

「神と無」、「現代の中で同様に「エコロジー的神学」を標榜するプロセス神学では、際立った聖書解釈の線は、主張者によってかなり相違している。全体としては、哲学的原則との合致の方に注意が払われている」、「プロセス神学の方は、「絶対現在」における神と世界の相互的透入に求める」、「宗教哲学的な瞬間即永遠、永遠即瞬間としての終末論解釈をとり、西田哲学に近いと言えよう」(239)、「楽観主義とも批判される」、「モルトマンは、三一神論を基礎に置くかぎり、プロセス神学のプロセス偏重を修正する。しかしその三一神論は、たしかに古代教会の実体的三一神論とは異なるにしても、悪しき意味での神話的性格を払拭できない」(240)、「モルトマンの批判によれば、プロセス神学においては「無からの創造」はカオスからの創造へ変えられ、神と自然とは融合して一つのプロセスに統合された世界過程になる恐れが、十分ある。「自然の神学」がここでは自然の神格化になる」「モルトマンの創造論の努力は、自然とともに神の生命運動の新しい人格主義を目ざしていることも、いなめない」(241)

「結び」、「創造的進化あるいは進化的創造の生命運動は、根源的に、絶対現在における救済の逆対応によって深く性格づけられている」(241)、「逆対応」的、「モルトマンでは」「個体の死を機縁とする実存論的自己の問題は、現在のところまで、ほとんど関心の枠外に置かれている。しかし、実存論的自己の自覚は、宗教心のはじめであり、決して、種のおよび類的な人間自己と矛盾し合うものではない。むしろ相互に浸透ないしは補完されるはずである」「モルトマンのメシアニズムを修正しつつ、彼の神学的動機をかえって生かす道が残されているように思われる」(242)

モルトマン（創造と科学（進化）、宗教哲学的論理性といった問題）を中心に、西田哲学あるいはプロセス神学、ユダヤ神秘主義、ブルトマン的な実存論的自己理解の真理性の評価など、注目すべき4つの流れの全体が論じられる。

バルト、ブルトマン、パネンベルク、モルトマン、それぞれの真理契機と問題点を明らかにした上で、これらの論理的な統合を目ざす

2 . Was ist heute Theologie?

I Der Weg der Theologie im 20. Jahrhundert

1. Das Ende des 19. Jahrhunderts
2. Der Aufbruch der Theologie im 20. Jahrhunderts
3. Auf der Suche nach sakularer Relevanz
4. Auf der Suche nach christlicher Identität
5. Theologie im " ökumenischen Zeitalter "

II Heutige Vermittlungen der Theologie

1. Existentialtheologie:
Rudolf Bultmann und das Problem der Geschichte
2. Transzendentaltheologie:
Karl Rahner und das Problem der Anthropozentrik
3. Kulturtheologie:
Paul Tillich und die religiöse Deutung der sakularen Welt
4. Die Politische Theologie und die unvollendete Neuzeit